

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

臨床現場の死生学 —関係性にみる生と死—  
佐々木恵雲著 法蔵社 2012年12月初版



はじめに

前回お約束したように、今回は、自分自身の死である一人称の死について、本書を用いて考えてみたい。

皆さんは、どのような死を希望されているのだろうか。巷では、ピンピンコロリ(PPK)が人気ナンバーワンのものである。理由は、苦しみたくない、家族に迷惑をかけたくない、あるいは、安く済むからだろうか。

では、私から問いたい。ピンピンコロリとは、突然死である。具体的には。心筋梗塞、くも膜下出血。それとも、交通事故で死にたいのか。65歳以上に限れば突然死の頻度は高々3~4%で、そもそも一般的に、死因を自分で選ぶことは出来ない。私達はどのような死を迎える可能性が高いのか。現在、死亡原因の第1位はがんで、3.5人に1人ががんでなくなる。よって、「歳をとり、がんで死ぬ」という設定で、私自身の死について考えてみたい。

本書の内容・感想

今号の別のところで、すべての死は清く尊いもので、良い死、悪い死はないと述べた。では、何を問題としないといけないのか。それは、死に至るまでどのように生きるか、生き切るかである。著者もそのように説いている。

日本尊厳死協会は、「尊厳死とは傷病により不治かつ末期になったときに、自分の意思で死にゆく過程を引き延ばすだけに過ぎない延命措置をやめてもらい、人間としての尊厳を保ちながら死を迎えること」と定義している。不治かつ末期になったときに、「自分の意思」で治療方針が決められるのか、日本では「家族の希望」が優先されるのではないかという疑問がある。さらに、本当に、「死にゆく過程を引き延ばすだけに過ぎない延命措置をやめる」ことが正しいのか、家族は続けることを希望するのではないかと問題はある。しかし、「人間としての尊厳を保ちながら死を迎えること」を否定する人はいないだろう。だとしたら、「人間としての尊厳」とは何か。清水哲郎は尊厳を、「自らを価値ある、有意義な存在と感ずる自尊感情」と定義している。

「死の臨床研究会」は、死を目標にせず、死ぬまでの生に焦点をあてて発足した。「人間らしく生きる」ことが大切であると主張する。では、それは、具体的に、どう生きることなのだろうか。

「人は生きてきたように死んでいく」とよく言われる。日本のホスピスの第一人者である柏木哲夫は、「みんなに感謝の気持ちを持って生きてきた人は、周りに感謝しながら死んでいく。また文句ばかり言ってきた人は、文句を言いながら死んでいく。誰にも感謝せずに生きてきた人は、周りに感謝せずに死んでいく。人々は生きてきたように死んでいく」と述べ、「周りに感謝しながら死んでいく」ことも、「人生の実力」であるという。感謝の気持ち、言葉をもって死を迎えるのは、まさに人間にしか出来ない「人間らしい死」であろう。そして、周りの人もこれから旅立つ方にお礼を述べる。このことにより、見送った人達も、気持ちよくその人の死を受け入れられて、良い思い出になるのではなかろうか。

終末期になるとできることが少なくなり、周りに迷惑をかけているように感じ、「自ら価値ある、有意義な存在と感ずる自尊感情」を失ってしまうかもしれない。だが人生を振り返り、「色々苦しいこともあったけ

ど、総じて楽しい人生であった」、「子供も育てた」、「生まれてきて良かった」「自分が自分であって良かった」と心の底から感じられたならば、「自尊感情」が生じ、尊厳のある生を送れるのではなかろうか。著者もそう言う。そして、近い将来訪れる、「自分の死」を受け入れることが出来るのではなかろうか。

私も、「感謝の気持ち」の大切さを再確認して生き仕事をして、医療スタッフも含め、全ての人に感謝しながら死を迎えたい。

理事 井上 林太郎